聖　鐘

日本聖公会東京教区　**東京聖三一教会**
〒155－0032　東京都世田谷区代沢2－10－11
TEL　3421－3646　FAX　3414－9023
URL　trinity.web.infoseek.co.jp
牧師　司祭 高橋顕

信仰を持つ喜び

司祭　高橋顕

私は小学校から高校まで沖縄の名護で育った。父は聖公会の牧師であった。私が小学校五年生の時、水害があり、私の住んでいた名護の教会の礼拝堂も牧師館も床上一メートル以上の水に浸かった。大雨の早朝にあっという間に水が建物に流れ込んできたので、家具や日用品や衣服、また礼拝堂の祈祷書や聖歌集もほとんどが汚れた水に浸かり、使い物にならなくなり、失われた。

その日、当時の沖縄教区の主教であられたブラウニング主教とその奥様が名護の教会の我が家に来られた。ブラウニング主教は後に米国聖公会の総裁主教となられた。その日、ブラウニング主教は名護の教会が水害に遭ったと知って、すぐに奥様と駆けつけて来られたのだ。主教は私の父と一緒に、家中の泥にまみれた畳を何枚も外に担ぎ出した。主教の姿は、まさに頭から足まで泥まみれであった。

私の母は水浸しになった衣服や日用品を、失意のうちに仕分けしていた。その母に主教の奥様が「私が夕食を作りました」とたどたどしい日本語で優しく話しかけた。驚いている母の前に、主教の奥様は、ラザニアが盛られた見たこともない大きな皿を車から持ってきた。子どもの私たち兄弟は「わあっ」と歓声をあげた。その日の夕食の時、主教ご夫妻と私たち家族は、その大きな皿を囲んで食前の祈りをした。

主教は、この水害のすべての被災者のため、私たち家族のため、そして水害に遭った名護の教会がまた新たに力強く宣教ができるようになるために、祈った。私は主教のその祈りを聞いた時、祈りの力というものがある、信仰の力というものがある、ということをはっきりと知った。

「困難の時、祈ることができるんだ」「神様は自分達と一緒にいてくれるんだ」と、主教の祈りを聞きながら、私は強く自覚をもった。

今から八八年前、関東大震災があり、東京も壊滅的な被災地となった。当時、東京に在住していた宣教師が、外国の本国に向けて、被災した東京の教会の状況を緊急電報で伝えた。しかしその電文は、たった三つの英単語であった。だが、その短い電文に計り知れない希望の力が詰まっていた。その電文は、「Nothing but Faith（何もないが、信仰がある）」であった。どんな状況にあっても、どこまでも持ち続けることのできる力、それが「信仰」である。その信仰を持って歩み続けるように、と神様は私たちを招いておられる。

私たち一人一人の信仰がさらに強められ、深められる喜びを、求めていきたい。

教会委員会報告より

（7月・9月・10月）

［7月］

①教会施設保全基金等を一般会計のために用いることの承認、及び教会塔屋外壁改修のために約五百万円支出することの承認を、総会において決議する必要があると判断し、11月13日(日)に臨時受聖餐者総会を招集することを確認。

②夏・秋の行事（ぶどうの木一泊キャンプ、平和の集い、子ども映画会、細田衛士氏講演会、バザー）についての日程及び準備状況の確認。

［9月］

①教務報告・・・7月18日にルツ石井千枝さんがご逝去された。8月14日にアグネス越村愛子さんがご逝去された。

②電話工事とインターネット回線工事の日程の確認。

③バザー収益の奉献先の確認・・・収益金の30％を教会の働きの為、10％をアジア学院の為、10％をアルデナウペポの為、25％を桃・柿育英会（東日本大震災遺児育英基金）の為、25％を震災被災地障害児支援の為。

④11月13日(日)の臨時受聖餐者総会の公示日程の確認。

［10月］

①教務報告・・・7月11日にメリー・アンドレ山本加洲子さんがご逝去された。9月14日にモニカ斎藤寿子さんがご逝去された。

②10月より年末・年始の礼拝及び教会行事の日程の確認

③バザーの準備状況の確認

④来年度（2012年度）の教会委員及び教区会信徒代議員選挙についての日程の確認。

臨時受聖餐者総会のお知らせ

10月2日に臨時受聖餐者総会の公示がされました。

開催日時　11月13日(日)
聖餐式直後

議案
①教会塔屋外壁改修工事承認の件
②教会施設保全基金を一般会計に用いる会計処理承認の件

すでに文書と委任状をお送りしてありますので、ご欠席の方は委任状の送付をお願いいたします。

諸報告・予告

・トリニティハウスと庭の間の通路が整備されました。川島一郎さん、服部貢士さんに感謝

・11月3日11時～聖アンデレ教会にて「チャリティデイ」。聖公会東京3・11ボランティア、聖イグナチ教会、とすねっと共催で東京で避難生活をする震災被災者支援。

・11月6日池の上ふれあいバザー。当教会も出店

・11月20日14時映画会『英国王のスピーチ』

編集後記

今号より編集スタッフが四名増え、レイアウトや内容のリニューアルに取り組みました。

玉稿をお寄せくださった方々に心から感謝いたします。

信徒の皆さま、これからもご寄稿をよろしくお願いいたします。

礼拝等スケジュール

◆降臨節前夕「光の礼拝」（山手グループ合同）
11月26日・午後6時・聖三一

◆クリスマスコンサート
12月11日午後2時

◆クリスマスイヴ礼拝
12月24日・午後6時30分
池ノ上駅からキャロリング
午後7時　クリスマスイヴ礼拝
午後11時　深夜ミサ

◆降誕日礼拝
12月25日・午前8時30分
10時30分
聖餐式(洗礼式)

◆新年礼拝
1月1日午前11時　聖餐式

2011・それぞれのアツい夏

ぶどうの木 サマーキャンプ報告

五十嵐　美奈

今から2～3年程前のぶどうの木を振り返ると、「今週の礼拝に子どもはいてくれるだろうか…」と思いながら聖堂に向かう階段を昇ることが度々ありました。それが、2009年1月から千葉大翔くん、今では皆勤賞の廣瀬英恵ちゃんは7月デーキャンプから、12月から緑川慶子ちゃん・浩太朗くん姉弟など近隣の子どもたちが出席してくれるようになり、毎週のぶどうの木礼拝に子どもたちの姿が戻ってきました。日々成長が著しい信徒の子どもたち、そしてこの近隣の子どもたちの存在が、「キャンプをやろう!」という私たちスタッフの気持ちを後押ししてくれました。

7月17日（日）～18日（月・祝）、デイキャンプの延長で開催しようと、トリニティハウスと和室を拠点に1泊することに。日帰りも含めて、乳児・幼児9名、小学生12名、お手伝いの中高生3名、保護者11名にスタッフ10名が参加しました。

庭でみんなで礼拝

〝キャンプ長〟高橋司祭のあいさつとゲームではじまった今年のキャンプ。楽しかったこととして、中込百花ちゃんはスイカ割りに銭湯と望遠鏡で見た土星、中込夏希ちゃんはトリニティハウスに泊まって遅くまでお友だちとおしゃべりしたことをあげていました。川嵜有希実ちゃんは、「みんなで銭湯に入ったり、花火をしたりしてとても楽しかったです。朝ごはんは、みんなでホットサンドを作って食べてとてもおいしかったです。私はまたキャンプができたらいいなと思いました」と感想を寄せてくれました。

代沢子ども文庫から2名の小学1年の女子の参加があったこともエポック・メーキング。初めて出会う仲間と遊び、普通に礼拝に参加する姿には何の違和感も無く「楽しかった!」と喜んだ1泊キャンプでした。

一緒に食事をし、枕を並べて泊まることで生まれる仲間のつながりの深さは誰もが実感と共に思うことですが、それを実現するには場所、スタッフ、そして何よりも参加してくれるキャンパーの存在が欠かせません。ぶどうの木は子どもたちの礼拝であるがゆえに、それぞれの成長の段階に応じて関わり方が変化し、メンバーも入れ替わります。久しぶりにサマーキャンプを実施し、今、集ってきている子どもたちの交わりを深めることができたことは、スタッフ一同にとってうれしい今年の出来事となりました。

スイカ、うまく割れるかな?

3・11を憶えて、子どもたちの未来のために

加藤　啓子

第12回目を迎えた「祈り、そして調べ　平和のために」は、東日本大震災という巨大な出来事の前で、私たちがこのことを忘れずに、被災された方々に寄り添って生きることを常に呼び起こしたい、ことにこのような現代社会をつくりあげてきた私たち大人世代が、子どもたちの未来の平和と安全のために「何かできないか」という思いから企画しました。

会場には近隣の方々やオザークファン、信徒およそ百四〇名が集い、聖歌隊の祈りの歌、永遠の青年のようなオザークの演奏を楽しみ、全員で共に歌い、共に祈り、暖かなひと時となりました。コンサート後に届いた東さんの友人のお手紙を紹介します。

―聖壇であのハットを被り、ブルーグラス音楽のなかでわずか一割あるという信仰に関わる曲が選ばれ奏でられ、感動的でした。Amazing Graceは最近あまりにポピュラーになりすぎて少々食傷気味でしたが、今回あらためてなかなかの歌だと再認識しました。

そしてメッセージの植松主教による大震災三ヵ月記念礼拝説教には胸を打たれました。最後に、代祷のウエストミンスター寺院の追悼式の式文は心にしみ入りました。3・11以降、この惨劇を目の当たりにし、自身の拙い信仰を打ちのめされた私にとって、心あたたまる慰めが与えられた貴重な時間でした。本当にありがとうございました―

会場での募金10万円はバザー収益と共に東日本大震災被災者支援のために用いられます。

平和の集いとブルーグラス

東　理夫

最初は不安ばかりだった。教会で、それも聖堂でブルーグラスをやるなんて、無謀だという思いが強かった。でも神を賛美し、イエスを愛し、教会で過ごした日々を懐かしみ、家族を送る天国での再会を願う歌なら、そうたいして違和感はないのではないか。そう考えはしたものの、これまでの平和の集い、平和のコンサートでのきちんとした音楽ではなく、どちらかといえばガサツなブルーグラス音楽―アメリカ東部の峻険なアパラチア山脈に移住したスコッチ・アイリッシュと呼ばれる人びとが持ってきた、教養も知性も無く、あるのは敬虔な神への思い、のこもった音楽が、果たして受け入れてもらえるかという懸念は拭いきれなかった。だがそれは杞憂だった。

聖三一教会に一人でも多くの人に来てもらいたい、と多くの友人や知人に声をかけた結果の、本人も驚くほどの入りだった。何よりも聖三一教会を知ってもらうこと、ブルーグラスを知ってもらうこと、その目標の第一歩が踏み出せたこと、その機会を与えてくださったことを心から感謝している。

ベース　大川均さん　ギター　東理夫さん　バンジョー　小柳征夫さん
マンドリン　中村隆一さん

過ぎゆく夏を惜しむ ファミリーパーティー

8月28日の午後、八幡道子さんの司会のもと、「ファミリーパーティー」が開かれました。南仏の香り漂うメニューに下鼓を打ちながら、この夏の様々なイベント、震災に関わる活動状況等の報告にしばし耳を傾けました。

高橋司祭からは、牧師就任5ヵ月を迎える昨今の近況などがユーモアたっぷりに語られ、代沢の地にすっかり馴染んでいらっしゃるご様子に皆安堵。また東理夫さん、後藤務さん、千村雅信さんによる「おやじバンド」の演奏に、会場はまるでビアホールのようなくつろぎの空気に包まれました。

引き続いての「夏休み子ども映画会」の演目は、「ダンボ」と「トムとジェリー」。支配人東理夫さんのお話で、夢いっぱいのディズニーアニメにも、当時のアメリカの深刻な社会背景が反映されていることを知り、新たな発見でした。近隣の方々の参加が定着しつつあるのも嬉しいことです。

過ぎゆく夏を惜しみつつ、新たな季節へと気持ちを向けるステップの時となりました。

歩みに触れる　敬老の集い

9月11日、「子どもとともに捧げる礼拝」に続き、敬老会会員106名のうち、44名をお迎えし、敬老のお祝い会が開かれました。司会は五十嵐美奈さん。ぶどうの木からの手作りカードが、小さな手から、長い歩みを刻んだ手へと渡され、また新たに殿堂入り?された10名の方には75年前のお誕生当日の新聞もプレゼントされました。

高橋司祭からお祝いの言葉と沖縄の祝い歌、お琴演奏に続き、加藤望さんと川島一郎さんによる爆笑芸「二人羽織」に会場は湧きました。「懐かしのお写真拝見」では、長老、秋山静一さん、菊池英男さんの軍服姿、その他数名の方々のあどけない幼少時代、甘酸っぱい青春時代の貴重なお写真がエピソードとともに紹介されました。そこには激動の時代を歩まれた重み、ご家族との温もりの時間など、様々なものが写しだされて、感慨深いものがありました。

人数的にも「敬老会員」に圧倒される教会の現状ではありますが、それでも、普段なかなかお話を伺う機会もない先輩方の歴史に触れることは、これからその歩みを引きついでゆく私たちには大切なことだと感じます。

こんなに大勢の方がお元気で教会を支え続けてくださっていることに感謝し、ともに祝福に与ったひとときでした。

（以上　行事担当M・T）

歴史の街へ　日帰りバス旅行

西澤功宰

今年も9月13日にバス旅行を行いました。今回の旅先は高橋司祭の〝真鶴の「しょうとく丸」の魚定食はおいしい〟という一言で小田原方面、小田原聖十字教会に決めました。天候にも恵まれ、35名（3名直行）が参加、出発前の高橋司祭のお祈りから加藤壮年会会長、バスの運転手、ガイドさんの挨拶等でにぎやかに明るい雰囲気のうちに出発しました。

9時半ごろ到着、早速礼拝をさせていただき、ほぼ満席になりました。礼拝後には大野清夫司祭に当教会の歴史、また歓迎のお言葉をいただき、信徒の中川様には大変ご厄介になりました。匠の技を随所に見ることができ、戦前の礼拝堂が今なお大切に使用されている素晴らしい教会でした。

次の目的地小田原城もこの時間になると大変暑く、天守閣に入るにも勾配がきついので自由参加でしたが、30名が入館しました。戦国大名小田原北条氏の居城、また徳川譜代大名の居城として幕末まで重要な役割を担ってきた城でした。広い城址公園の木陰で天守閣を眺めながら休憩を取りました。

昼食は真鶴の「しょうとく丸定食」、地魚盛り・小付け・サザエつぼ焼き、ご飯・味噌汁のおいしい食事でした。また暑かったため冷たい飲み物も多くでました。

名勝「錦ヶ浦」の地形を活かした「アカオハーブ&ローズガーデン」は急こう配のため、バスで坂上まで行き、ゆっくりテーマガーデンを見ながら、途中ローズハウスによってバラのアイスクリームなどを食べたり、また散策したりして下って来ました。バラの時期は外れてしまいましたが、大きな箱庭の巨大な松の盆栽は見事でした。

帰路には車中でビンゴゲームを楽しみ、小田原駅を経て渋谷で無事解散しました。

日帰りバス旅行も今年で11年目、皆様のご協力によって続けられておりますが、これからも多くの人の参加を希望します。ありがとうございました。

アジア学院ワークキャン

尾澤うめ子

久しくアジア学院でのワーキングキャンプと疎遠になっていた私たちに、東日本大震災は目を覚ませてくれました。かつて、ELの会や婦人会のメンバー、山手グループ合同キャンプ、中ハイクラブのサマーキャンプと毎夏共同作業の奉仕をしていた時が一気に思い出され、礼拝を共に捧げた礼拝堂や食堂のあるコイノニアハウスはどうなったのかと思いを巡らしました。

この地震により、建物の復旧工事費用だけでも3億円が必要で、さらに驚いたことに、福島原発から110キロ離れているこの地域も放射能漏れの影響を受けて、来年創立40周年を迎える事業の一環として土台が完成していた農業研修棟は、ホットスポットと化したことを知らされました。事故の影響は甚大で、野菜は、ハウスのみで育てているためジャムは作れず、牛の飼育は不可能、鶏たちも鶏舎から出て遊ぶこともできないためか、ストレスがたまってしまいました。

今年5月入学の21名の留学生は、町田市にある農村伝道神学校での研修プログラムを余儀なくされ、聖三一教会からの最初2回のキャンプでは、学生がいないさびしい環境での作業となりました。八幡眞也さん、川島一郎さんが車を提供して下さり、のべ16名が参加しました。主な作業は、小麦や小豆の選別、大豆畑の草取り、ゴーヤーの棚作り、留学生用の寝具干し、ハウス内での水まき、不要書類のシュレッダーかけ、ウエスの作成等。学生の手が無い間のワークで、多少のお役に立てたと思います。

今後、放射能の影響から一刻も早く解放されて、子供も参加できる夏のワーキングキャンプを復活させ、完全循環型有機農法を学べる場が戻って来ることを祈ってやみません。

気の遠くなるような
小麦の選別作業

チャリティーバザー

新しい時代に向けて、教会とともに歩む

今年のバザーの特色は、何と言っても震災で被災した方たちに向けて支援を行う、という意味合いを強く反映した内容になっています。準備の段階でも主たる議題は、どのような形での支援が適切かということでした。

私自身、8月に被災地を訪問したことによって、「自分には何ができるか」という問いが強く感じられるようになってきました。被災地での支援も必要です。けれど、それは大変難しいことです。多くの人が同様に考えたことでしょう。しかしバザーならどうでしょうか。バザーの成果が上がれば上がるだけ支援も多くでき、かつ身の丈にあった支援にもつながっていく。出来るだけ無理せず継続して関わっていくことが、一番の貢献だと考えられるからです。高橋顕司祭も、「やるからには成果を」と言って下さったのがバザー委員のモチベーション上昇につながっています。

この点からバザー委員会では、今年のバザーをより良いものにするためにどうするかを検討し準備中です。

例年と比べ変更があるのは、野外レイアウトと開場中のイベントの二点。一点目は、来場してくれるお客さんがより快適に過ごせるように、食券を必要とする売り場と、そうでない売り場の住み分けを行ったり、専門的な売り場を設け、わかり易い表示で動線を確保したりすることです。もう一点は、明確なステージとタイムテーブルを用意し、アナウンスを含めイベントを大々的に行うことです。

今年のバザーが成功し、しっかりとした支援ができるよう、教会の皆さんと協力し当日まで取り組んでいきたいと思います。

バザー委員長補佐　後藤敬一

逝去者記念礼拝に出席して

主にある交わり

沖島幸子

去る九月二四日、聖三教会の今年の逝去者記念礼拝に出席させていただきました。三年ぶりの参加でございました。

夫が亡くなって六年半の時が過ぎました。時間は過ぎましたが、今も思い出さない日はありません。好きだった料理、好きだった眺め、それらがいつも思い出を誘うのです。そんな気持の遺族にとって、逝去者記念礼拝はありがたい嬉しいお誘いです。

午後二時、礼拝が始まり、祈りが奉げられ唱えられます。聖餐も頂くことができました。お祈りの言葉の中の「主を信じて世を去った人も今なお世にある私たちも、常に主にあって聖徒の交わりを楽しませてください」と祈られるとき、心から嬉しさが湧き上がります。

夫の家族は一年間に父母、兄、姉達、七人の名前が呼ばれ祈られます。私はその度に心に近く近くその人たちを感じます。どのご家庭でもきっと同じ感じをお持ちなのでは、と思います。

今年は、鈴木宏尚さんのお父様がお見えになりました。亡くなってから七年半の時が経ったとご挨拶なさいました。

大きな悲しみのご一家にとってどんなに長い、苦しい時間であられたかと思います。そして、少しずつ立ち直られて来られたご様子も語られました。宏尚さんのお妹さんのご家庭に男の子が与えられ、その赤ちゃんが宏尚さんそっくりで、と声を詰まらせてお話しくださり、居並ぶ私たちも思い深くお聞きしました。

久しぶりにこの会に出席し、心を洗われ、感謝をいっぱいに帰宅いたしました。

リレートーク

新宮のドクトル　大石誠之助さん

森田麻里子

今年六月一八日和歌山県新宮市の真宗大谷派僧侶高木顕明さんの「遠松忌」に参列しました。翌朝大石誠之助さんのお墓参りをし、新宮聖公会の礼拝に出席しました。荒木執事から教会の周辺はかつて被差別部落だったと伺いました。高木さんは門徒の多くが被差別部落の方であることから、自身の差別意識に気づき、大石さんと部落問題を考えはじめました。今から百年以上前のことです。

一八六七年生まれの大石誠之助さんは兄の影響で受洗し、アメリカで医師の資格を取り、新宮で開院。貧しい方には無料で診察をして「ドクトル」として敬愛されました。公娼制度に異論を唱え、日露戦争に反対した大石さんと高木さんの「自由・平等・非戦の先覚者」としての顕彰碑が、新宮駅前に建立されています。顕彰碑「志を継ぐ」には、無実の罪で「大逆事件」に連座させられたお二人を含めた六人の名前が刻まれています。

一九〇九年宮下太吉さんが信州で爆弾実験をしたことで、一九一〇年に「大逆事件」が起こりました。思想弾圧を目的に事件はフレームアップされ、幸徳秋水さんが逮捕されました。社会主義に関心を持ち、幸徳秋水さんと交流のあった大石さんも六月に逮捕され、翌年一月に「大逆罪」で死刑になりました。富士見町教会で植村正久牧師が「遺族慰労会」を開きましたが、葬儀は許されませんでした。

十一月二六日午後二時から信濃町教会で大石さんの百年後のレクイエムを主催「一羊会」、後援「教区人権委員会」で致します。キリスト教人道主義の精神で活動をした大石さんの勇気を記憶したいと思います。東京大学教授で、哲学者の高橋哲也さんに『『逆徒』の記憶と現在」というミニ講演会をして頂きます。

まじわり

秋山俊哉さん

秋山俊哉さんは、聖三教会で一年程祭壇奉仕研修を受けました。当時聖十字教会の管理牧師だった長谷川司祭に声を掛けられて始まった始まった研修ですが、そこで秋山さんは衝撃を受けるほど「主の臨在」を感じました。

研修後の二〇一〇年十二月に直子夫人と聖十字教会から教籍を移し、今年三月には直子さんのお母様の田縁洋子さんも転入しました。大きな教会で少し敬遠気味だった聖三教会が、実際に来てみると自由闊達、人々の交わりが活発な「外に開かれている教会」だと思い、その自由な雰囲気に惹かれたと言います。

秋山さんは働き盛りの五十一歳。大学卒業後に入社した海運会社の陸員（陸上勤務）として、勤務しています。オーストラリア、アジア、アフリカ、中近東など、海外出張も多く、聖三教会と縁の深い韓国のウルサンは馴染みのある都市です。海外での仕事は文化、自然の違い、また歴史による人々の感情の問題などの苦労が多くあります。

三十三歳からの二年半はアラブ首長国連邦のドバイに赴任しました。当時は日本人観光客が訪れることもほとんどなかったドバイには、ムンバイとの直行便が毎日飛んでいて印僑と呼ばれるインド人が大勢います。アラブ特有のビジネスシステムの中での仕事の相手はアラブ人ではなく、語学力に長けた人たちです。さまざまな場面で「異文化」を強烈に意識する体験でした。

直子さんとは社内結婚です。シナリオを書くほどの直子さんが社内報に書いた本の紹介文を俊哉さんが読んだことがなれ初めでした。

大阪勤務時代に聖書と出会った秋山さんは、プロテスタントの教会を経て、自宅から近い聖公会の聖十字教会に移りました。二〇〇四年十二月に受洗、一年後に直子さんとお義母さまも洗礼を受けました。

お義母さまは、病床受洗のため一度も教会に行くことのできなかったご主人の分もと、秋山夫妻と一緒に主日の礼拝に出席しています。

聖三教会に転入して十ヵ月余りたつ今、秋山さんはBSA三支部の会員です。これからは「まだ少し先かな」と言いますが、祭壇奉仕もしたいと考えています。また、これまでの経験から、海外の教会との交流にも関心を持っています。

直子さんもお義母さまも少しずつ教会でのお知り合いができてきました。

（編集部　T・N）

心の余白

岡村邦輔

天と天体の運行を観照しうる故に私は生まれてきたことを幸福に思う、とは古代ギリシャ（アナウシマンドロス）の硯学の言とか。カントが道徳律を夜空の星になぞらえたのは有名だ。

―もしも義務も制裁もない道徳が存在したなら、と私は思う。

ゲーテは、徳は夜空の星のごとく隠れたところで輝く、と言う。

ケーベルは、エマオの夕べの場面が聖書の中で最も美しい、と言う。

「我らと共に留まれ、時夕べに及びて日も早や暮れんとす」をもってルカは福音書を閉じる。

Silent majority（サイレント マジョリティ）は叫ぶ。「吾等と共に留まれ」と。